

## 6. 渋谷一美研究員による考察

この度、「保育所の保育内容に関する調査研究」のお話をいただき、自らはもとより、園として現在抱えている問題点への取り組みや保育の見直しを考えていくうえで、たび重なる会議や話し合いを通して、保護者との連携ばかりでなく職員間の連携においても大きな意味のある時を過ごさせていただき、「子育て支援」とは何か、「専門職としての心がまえ」とは何かを考え直すよい機会となりました。

当園においては、「家庭・保護者との連携について」というテーマに基づいて調査研究を行ったのですが、保育所保育指針の中には、自己の研鑽のための研修の重要性についてもうたわれています。特に園内研修は、職員の共通意識を高めていくためにも必要不可欠なものです。園内研修を通して、個々の考えや思いを知り、皆で話し合うことによって物事への方向性を導いていくことができることと思います。週 40 時間体制に加え、多様な保育メニューを求められ日々の保育に追われる中での園内研修は、時間の調整がかなりむずかしく職員の理解や協力なしでは、成り立ちません。園からの要請だからではなく、自らが学ぶという姿勢を引き出し、いかにその思いを持続し自分の物にしていくかが大切であり、研修担当者の課題となることと思います。内容においても園生活における基本的な事柄から専門的知識まで幅広く、どの時期にどのような内容のものを計画したらよいのか。また、外部から講師を招いての研修、保護者も共に参加しての研修、職員自らがテーマを決め取り組み、他の職員に提案していく方法とケースもさまざまです。

園内研修のみならず、園外研修は、自らの視野を広め他園の人たちと触れ合うことにより、知り得る情報や同年代・同じ立場の人たちと知り合い悩みを共有したり、視点を変えて発想の転換を行うことにより解決の糸口が見えてきたりします。研修等を通して仲間づくりを行い、保育の幅を広げてほしいと思います。

最近の経済不況により、各行政も財政の見直しの中で研修に掛ける経費を削減している所が、数多く見受けられます。保育指針の中でも研修の重要性がうたわれ保育士の国家資格化に伴い保護者への相談助言が義務づけられた今、最も時間と経費を掛けていただきたい分野が軽視されていく傾向にあるのは残念でなりません。福祉の世界が目まぐるしく変化していく中、その状況を把握しその流れについていくためにも欠かせない研修であるはずなのに、参加したくても出張が認められない。経費がでない。また、自らの休暇でと願い出てもフリー職員の配置が充実しておらず保育に支障をきたすため認められないという声も聞かれるようになりました。研修に参加し、自らを高めていきたいという意欲のある人の思いが通らない辛さがある一方、保育士の意識の低下もアンケート結果から見えてきています。

保護者の育児能力の低下が問題視されていますが、変化してきているのは保護者ばかりではなく、中には受け入れ側の保育士にもその傾向が見えつつあるようです。保育士資格の国家資格化に伴い、多様なニーズに応じていくためにも保育士の資質が問われる時代となり、より深い専門職としての知識が求められている今だからこそ、保育に携わる人、一人ひとりがその責任の重さを認識し、自らを高めていくためにも自己の研鑽に努めていただきたいと思います。そして、皆

が参加したくなるような魅力ある研修の計画を各関係機関にお願いすると共に、未来の保育士を養成する大学等にも意欲ある人材を育てていただけるよう願っています。

家庭との連携において、大きな役割を果たしているもののひとつに連絡ノートがあります。連絡ノートは、ただ単にその日の出来事等を知らせるためのものではなく、子どもの成長記録であり、保護者と担任をつなぐ交換ノートといってもよいものです。保護者の中には、子どもの様子のみならず、まるで育児日記のように親としての悩み、喜び、疑問等や時にはパートナーに対するグチ等も加わることもあり、担任も同調したり励ましたり、時には慰めたり子どもたちの午睡時間を利用して書いています。連絡ノートは、家庭での様子や親子のかかわりを知るよい方法でもあります。保護者にとっては毎日の楽しみであり、お迎えにきてすぐに廊下のベンチに座ってノートを広げる人や、駐車場の車の中でまずはノートに目を通してから帰路につく保護者の姿を見かける度に、連絡ノートの持つ大切な役割を感じ、おろそかにはできないと心を正される思いです。そんな日々の中で常々思うのは、若い職員の書く文章の暖かさ。母親たちと同年代ということもあり共感したり、独身保育士にとってはワーキングマザーを尊敬する気持ちもあるため、日々の子育てに対して「子育てって大変だね。私たちはいつでもお母さんの味方だから頑張っ…」とエールを送ってくれています。ベテラン保育士からの、子育ての先輩そして、同じワーキングマザーとしての立場からのアドバイスや励まし。若い保育士からのがんばれコール。このような面からみても職員のバランスの大切さを感じています。毎日が相談日の夕方のお迎え時も、子育てや家庭における悩みは、経験豊富な保育士が対応することが多いものの、顔を合わせた職員誰もが一言「おかえりなさい」と声を掛け、一言二言その日の様子を伝えることにより、保護者との信頼関係は深まります。ほんの一言、掛けてもらえる言葉がなによりも嬉しいのが親心であり、保育園は一步園舎に入れば笑顔で待っていてくれる人がいて、ホッとできるなごみの家であってほしいと思います。

常に同じ目線、同じ立場で物事を考え、いつの時も私たち保育者は母親の味方なんだということ伝えていくことにより、保護者も心を開いてくれることでしょう。子育て支援は、子どものみならず親が人として育っていくための支援でもあり、おなかの中に生命を受けた時が親としての誕生日であり、子どもと共に親も成長していくのだということ。そしてまた、私たち保育者も子どもや保護者からたくさんのことを教えてもらいながら日々過ごしているのだということを忘れてはいけないのだと思います。

これからの課題として、従来の保育所の役割としての「保育に欠ける乳幼児を保育する」という主業務の他に、育児のノウハウをたくさん持った保育所の必要性がますます高まり、本当に支援を必要としている人に対する支援活動をどのようにしていくか。その支援の仕方が問題になってくることでしょう。

結婚や転勤等により、友人や実家から遠く離れ、唯一の相談相手であるはずの夫は仕事で帰宅が遅く、子育てに対する悩みや育児不安を抱えながらも相談相手もない。家に閉じこもり、育児雑誌を教科書として孤独な子育てをしている母親を誘いだし、いつ来てもいいし、いつ帰っても

いい。そこに行けば同じ境遇の仲間に出会える。保育所は、出会いの場を提供し、そこで気の合った友達を見つけ、それぞれが生き生きと育児を楽しめるようになればいいと思います。子育てへのアドバイスもちょっとしたヒントがあればよく、子育ての経験談や失敗談、困ったときの解決方法等を伝えることによって、自分だけではなかったんだと安心させてあげることも必要なのではないのでしょうか。

保育所が人と人との出会いの場であり、情報の発信源となることにより、地域との連携も深まり地域の保育所と認められていくことでしょう。一人でも多くの母親が、「子どもってかわいいね。子育てって楽しいね」と思えるような社会となる手伝いや未来の父親、母親となるべき中・高校生の体験学習の受け入れ等を積極的に行い、生命の尊さや生命の重さを伝えていけたらと思います。

「今の子どもを救うことは、未来の子どもを救うこと…」

研修会で伺った講師の先生の言葉が胸に響いています。